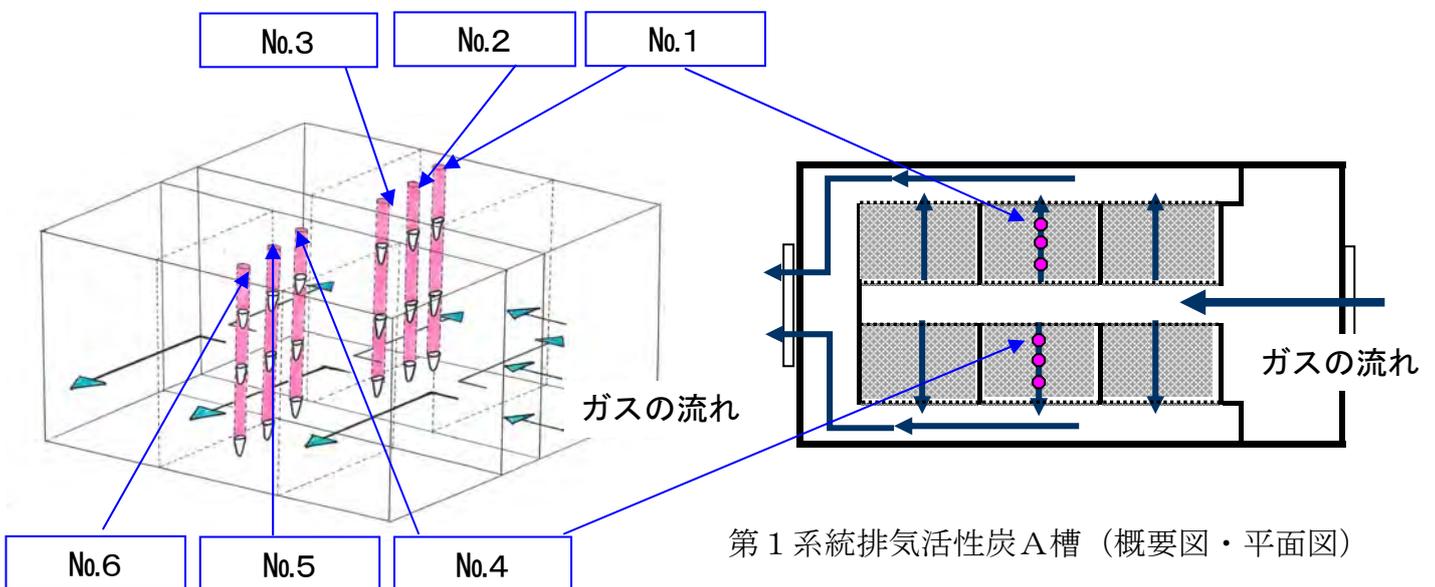


## 第 1 系統排気 S N 活性炭分析結果について

第 2 1 回監視円卓会議 (H22. 12. 22) でご説明した方法に基づき平成 2 3 年秋期における活性炭交換時にピートサンプラーを用いて第 1 系統排気 S N (セーフティネット) 活性炭をサンプリングし、PCB 及びダイオキシン類含有量を分析した。

1. 調査対象：第 1 系統排気 S N 活性炭 A 槽 (使用開始：平成 2 2 年 7 月)
2. 調査時期：平成 2 3 年 9 月 8 日 (秋期定期点検時における活性炭交換直前)
3. 調査方法：以下の通り

## ・調査(サンプリング)地点位置



第 1 系統排気活性炭 A 槽 (概要図・平面図)

## ・調査状況写真



ピートサンプラーによるサンプリング状況

#### 4. 調査結果

試料名	分析結果	
	PCB(mg/kg)	ダイオキシン類(ng-TEQ/g)
No. 1 (下流) ↑	27.9	0.0019
No. 2 (中流) ↑	0.09	0.00012
No. 3 (上流) ↑	6.00	0.000056
No. 4 (上流) ↓	4.17	0.000042
No. 5 (中流) ↓	22.2	0.00058
No. 6 (下流) ↓	21.9	0.000065

#### 5. 考察及び今後の対応

分析結果については、PCB濃度が吸着能力（PCBにおける設定平衡吸着量47,000mg/kg）に対して1000分の1以下の遙かに薄い濃度であること、前回の調査（平成22年3月）でスクラバー油等の油類の含有量も重量法下限値の0.01%以下であったことからクロマト現象は生じないと考えられ、また、No.1～6試料のPCB濃度に3桁程度の違いがあることは活性炭槽の中を通気させることから構造的に偏流が生じる可能性もあるが単純なバラツキではないかと考えられる、というコメントを日本環境安全事業株式会社ポリ塩化ビフェニル廃棄物処理事業検討委員会北海道事業部会（以下、「北海道事業部会」）委員から頂いている。

吸着能力については、本調査の含有量は平成21年及び22年に交換した排気活性炭のPCB濃度の範囲（<0.05～34mg/kg）と同等であり活性炭が破過したような特別の値ではないこと、これまでのデータ（資料4-2）においてSN活性炭の前後でPCB濃度が2～3桁下がっていること、活性炭槽上部目視からは槽中に風道等の隙間は見られなかったこと等から、SN活性炭は吸着能力に十分な余力があり有効に作用していると判断できる。

今後の対応としては、2年以上行った毎月の自主測定について管理目標値を3桁以上安定して下回っていることから、測定頻度について平成24年度からは環境保全協定に基づく環境モニタリング計画に基づく4回の測定と年2回の道とのクロスチェックにより監視していくこととしたい（北海道事業部会了解）。